

勝峰金風閣
吉木燦郎校訂

俳聖芭蕉全集

東京聚英閣

大正十三年五月二十日 印刷
大正十三年五月二十三日 改訂發行
昭和二年一月卅日 廿五版發行

〔定價金貳圓〕

(俳聖芭蕉全集)

校訂者

勝峰 晋風
吉木 燦郎

發行者

東京市牛込區橫寺町四十三番地
後藤 誠雄

印刷者

東京市京橋區北紺屋町二番地
下間 次郎 磨

發行所

東京市牛込區
橫寺町四三

聚

英閣

電話牛込四六二
振替東京四七八六九

芭蕉略傳

松尾芭蕉は正保元年伊賀國上野に生る。父は松尾與左衛門といふ。其の子、一男四女あり。嫡子、儀左衛門命清、後に半左衛門といふ。二男、半七郎宗房、童名金作、これ芭蕉なり。明暦の比、上野城代藤堂新七郎良精の嫡子、主計良忠の近侍として、出で、仕ふ。時に九歳。

主君良忠は、和歌を冷泉家に、俳諧を北村季吟に學び、俳名蟬吟と號す。

寛文六年四月蟬吟歿す。芭蕉、蟬吟に奉任すること十五年、その愛寵と感化に浴して思忘るゝ能はず、悲しみ遣る能はず、其のなき主の遺髪を首にかけて、高野山に登りをさめしより、頻りに此の世を敢果なみ、身を遁れんの心せちなりければ、暇を乞ふと雖も、さる文武の才あるを惜しみて許さねば、同じ秋の末なりけむ、主の館に宿直しける夜、門の傍なる松を越え出て、我が住める家の隣りなる、城孫太夫が門の柱に、短冊にかいて發句を記し、行方知れずとなりぬ。實に芭蕉生涯の大轉機に

して、年二十三なりき。

雲とへだつ友かや雁の生わかれ

家を通れし後、京都に季吟を訪る。東山近傍に居を卜して、釣月軒或は泊船堂宗房と名乗り俳諧修業に心を費す。某々等二人の知人と共に、西の方太宰府まで遊歴したるも、此比にやあらむ。されど恐くは衣食の途に窮してにや、いつか故郷に歸れり。

寛文十二年九月、江戸に下る。當時芭蕉二十九歳にして、季吟の門下卜尺及び鯉屋杉風の許に身を寄せ、水道工事の帳面附などなして糊口の糧と爲しるたりしが、元よりかゝる俗務風流の士によく堪へ得ざる處、後放擲して、一定の住所もなく、本郷或は本所邊を漂泊しつゝありしが、天和元年、上京後十年にして、漸く深川六間堀にその居を占めぬ。此庵は鯉屋杉風が建て、贈りし、六疊と八疊の小屋なりしが、門人曾良近傍に住みて薪水の勞をとり、杉風以下の門流代るく米鹽を贈る。

米買に雪の袋や投頭巾

水油なくて寝る夜や窓の月

清貧の狀察すべし。又、庵に芭蕉を植ゑて、自ら芭蕉庵と稱したるは、卜居の翌年天和二年の事なり

き。芭蕉庵に居を下する以前、漂泊の間にも夢寢に俳諧を忘れず、刻苦勵精、遂に延寶八年

枯枝に鳥とまりけり秋の暮

の一句に、正風の礎を築きぬ。杉風、卜尺、螺舎（其角）、嵐亭、治助（嵐雪）等名風又雲の如く膝下に集まり來りて教へを乞ひ、頓に名聲興り來りぬ。

されど芭蕉安住の地を得し喜びは短かき。天和二年の冬芭蕉庵焼失して、芭蕉纔かに身を以て免る。此火災は、芭蕉をして、如火宅の悟を得せしめ、一所不住の決心を堅めしめぬ。俳風更にこゝに一轉せり。

焼け出されたる芭蕉は甲州に赴きて、杉風の姉又は佛頂の弟子六祖五平などを頼りてゐたりしが、翌年其角素堂等五十餘人の盡力にして、秋冬の間に芭蕉庵建設せらる。これより以前五月の比はひ芭蕉既に江戸に歸りゐたりしが、漂泊の思ひ止まず、その後十數年芭蕉庵改築せらるゝこと前後四度に及びたれど、芭蕉の此處に足を留めたるは、多くは病中か、暫時の休息の時に過ぎりき。

天和四年は貞享元年なり。此年の八月上方に旅立つ。翌二年の夏江戸に歸るまで伊賀伊勢を始めとして、濃尾地方、近江、山城、大和を遊歴して、至る所に正風を鼓吹せり。

貞享三年は養病に暮れぬ。四年十月再び西に向つて、一笠一杖の漂泊の旅に上る。西紀伊より播磨を踏み、歸途は木曾より善光寺を経て、翌元祿元年に歸る。

元祿二年、更に曾良を伴つて、奥羽の太行脚に上る。陸奥より出羽へ越え、越後より金澤敦賀を過ぎ、伊勢に出で、伊賀に歸り、四年の冬江戸芭蕉庵に人となる。

江戸に歸りてより、暫く門を閉して漫に人に會はず、瞑想苦心、俳諧愈々神に入らんとす。

閑居二年の後、元祿七年五月、西國より長崎の風物を賞さばやと、又西に向へり。これ最後の行脚にして、伊賀を経て京都に暫く滞在し、再び伊賀の老兄の宅を訪ひ、九月奈良を経て浪花に出で、この地にて宿痼の痼病起り、病臥の枕に就き、惟然、支考、去來、木節、丈草、正秀、其角等が懇到なる看護もその甲斐なく、九月十二日、遂に道修町花屋仁左衛門の離座敷にて、眠るが如く醜曠に就けり。遺骸は門弟に守られ、琵琶湖南義仲寺の境内に葬らる。行年五十二。

この下にかくねむるらん雪佛 嵐 雪

大正九年二月六日

目次

俳諧篇

春之部……………一

夏之部……………二二

秋之部……………四三

冬之部……………六八

紀行篇

・行脚掟……………八九

野ざらし紀行……………九二

鹿島紀行……………一〇二

笈之小文……………一〇四

更科紀行……………一一八

おくの細通……………一二一

日記篇

嵯峨日記……………一四八

文章篇

幻住庵記……………一五九

十八樓記……………一六二

。洒落堂記……………一六三

紙袞の記……………一六四

伊賀國新大佛之記……………一六四

月見賦……………一六五

既望賦……………一六七

鳥	之	賦	一六九
松	島	之	賦
幻	住	庵	賦
雪	見	賦	一七四
芭	蕉	を	移す
成	秀	が	庭上の松をほめる
柴	門	辭	森川許六離別詞
僧	專	吟	錢別之詞
堅	田	十	六夜の辨
栖	去	之	辨
更	科	妓	捨月の辨
閉	關	の	說
煤	掃	の	說
			一八二
			一八一
			一八〇
			一七九
			一七九
			一七七
			一七六
			一七五

銀河序	一八三
阿羅野序	一八四
三十番句合序	一八四
句合跋	一八五
伊勢記行の跋	一八六
虚栗集跋	一八七
蓑虫跋	一八七
閑居箴	一八八
自得箴	一八九
座右銘	一八九
机銘	一八九
瓢の銘	一九〇
澁笠銘	一九一

嵐	蘭	誄	一九二
東	順	傳	一九三
西	行上人像	讚	一九四
卒	都婆小町	贊	一九四
雲	竹白	畫像	一九五
杵	折	贊	一九五
石	白	頌	一九六
贈	風	絃子	一九七
與	或	人	一九七
贈	酒	堂	一九八
弔	初秋七日雨	星	一九八
醉	登三	二階	一九九
鄙	歌	自得	二〇〇

文字 摺石	二〇三
中將實方の家	二〇四
越後國能生宿白山權現社汐路之名鐘	二〇四
權七に示す	二〇五
甲州産屋ヶ崎にて	二〇八
白 髪 吟	二〇九
須磨の浦	二一一
保美の里	二一一
信州周德纂にて	二二三
書 翰 篇	二二七

花屋日記

(芭蕉終焉記)

.....一.....五一

もて來つる是ぞ年玉こゝろ玉
恵方から曳やことしの牛の玉

初 春

春立ちてまだ九日の野山かな
人も見ぬ春や鏡のうらの梅
年々や猿にきせたる猿の面
菟蓐にけふは賣かつ若菜かな

三日口を閉て正月四日

大津繪の筆のはじめは何佛
一年に一度摘るゝ薺かな
四方に打薺もしどろもどろかな
湖水のほとりに春を迎へて

誰人が薦着ていますはなの春

蓬萊に聞かはや伊勢の初便
三日月は正月ばかり誠にて
去年はやそこにすされよ次郎月
元日やおもへばさびし秋の暮

梅

常のはなし遁れにけりな梅の花
この梅に牛も初音を啼つべし

淺草の庵にて

留守に來て梅さへよその垣根かな
梅咲てよろこぶ鳥のけしきかな
梅に尾長鳥の畫讃

此花のあるじ顔なり尾長鳥

伊賀のある方にて

旅がらす古巢は梅に成にけり

梅林

梅白しきのふや鶴の盗れし
梅柳さぞ若衆かな女かな
さかりなる梅にすて引風もがな
梅咲や白の挽木のよき曲り

竹内一枝軒にて

世に匂へ梅花一のみそさゞる
あこくその心はしらすうめの春

山家

手鼻かむ音さへうめの匂ひかな
香に匂へウニほる岡の梅の花

門人何がしみちのくに下る

を馬のはなむけして

わするなよ藪の中なるうめのはな

網代民部雪堂に會

梅の木に猶やどり木や梅の花

子良館の後に梅ありといへ

ば

御子良子の一もとゆかし梅のはな

園女亭

暖簾の奥ものゆかし北の梅

饒三乙州東武行

梅若菜鞠子の宿のとり汁

山里は万歳遅しうめのはな

里の子等梅折のこせ牛の鞭

元 夜

春もやゝけしきとゝのふ月と梅
かぞへ來ぬやしきくの梅柳

上野卓侍亭月待 元祿四年

月待や梅かたけ行く小山伏

杵折の讃

此槌のむかし椿かうめの木か

去來のもとへなき人の事な

ど云遣すとして

鳶のさし味もすこし梅の花
梅が香にのつと日の出る山路かな

一歳夢のごとくにて猶佛た

ちさらぬ歎の程思ひやる斗
に候

四

梅が香に昔の一字あはれなり
古郷の梅や浪花の二年越
梅折て椿に迷ふたもとな
うめがかやしらゝ落くほ京太郎
紅梅や見ぬ戀作る玉簾
まちかねて隣の梅を折にゆく

鶯

掃除して來ぬ日は庭に鶯の
在原寺にて

うぐひすを魂にねふるか嬌柳

鶯にほろりと笹の氷かな
鶯の岡で鳴日はうす着かな

安倍川に名のみして

水上はうぐひす啼て水淺し
鶯の笹落したる椿かな
鶯や柳のうしろ藪の前

相國寺にて

うぐひすに感ある竹のはやし哉
鶯や餅に翼する椽の先

霞

季吟勸進帳巻頭

和哥の跡とふや出雲の八重霞

奈良に出る道のほど

春なれや名もなき山のうすがすみ

此繪かきたる人は繪倉何が
し外記とて十三歳なるよし
筆のはこびの美しかりけれ
ばざれ句書待る

霞やら花の雲やら煙やら
大比枝やしを引すてし一がすみ

陽炎糸遊

陽炎や柴胡の原の薄ぐもり

元祿二仲春啗山旅宿にて

陽炎の我肩にたつ紙子かな